

スーパー耐久シリーズ 2017 第3戦

SUZUKA “S耐” サバイバル

RACE REPORT



スリーボンド×日産自動車大学校×KONDO Racing

僕たち、私たちのGT3チャレンジ

このプロジェクトは下記のパートナー企業に支えられています。



◇レース結果◇

Pos.	No.	Team.	Type.	Laps.	Total Time
1	99	Y's distraction GTNET GT-R	R35	108	4:00'19" 445
2	3	ENDLESS・ADVAN・GTR	R35	108	4:00'30" 439
7	1	スリーボンド日産自動車大学校 GT-R	R35	91	4:01'11" 152

6月10日(土) 公式予選

60kgのウェイトハンディという不安を抱えての予選でしたが、天候にも恵まれ、A Driverの内田優大選手、B Driverの藤井誠暢選手、C Driverの平峰一貴選手、三人とも好タイムをマークしそれぞれの選手が力走を見せ、4番手からのスタートとなりました。

6月11日(日) 決勝

昨日よりも涼しい空気に包まれる中でスタートした第3戦鈴鹿。スタートドライバーは藤井選手。途中のSC中にピットインしない作戦を取って21周目で1位に躍り出ます。そして35周目に1回目のピットインをして内田選手にドライバー交代しました。開始から約1時間40分あたりで下位クラスの車両との接触があり、リヤの足回りを損傷してしまいました。その接触が原因で56周目にピットインし、そのままピットガレージの中に入ってしまい約40分間の修理を行いました。その修理でリヤの足廻り部品の交換を行い、ドライバーが平峰選手に交代し再びコースインしました。その後、平峰選手が最後まで走りきり、7位という結果でレースが終わりました。

好調の走りを見せた藤井選手、接触されながらもピットまで走りきった内田選手、あきらめることなく車を修理したチームのスタッフ、そして最後まで走りきった平峰選手、彼らのおかげでスーパー耐久シリーズ、1位の3号車から1ポイント差で2位という高順位で次戦オートポリスに繋ぐことが出来ました。

◇プロローグ◇

2012年からスタートした日産自動車大学校とKONDO Racingによるスーパー耐久レースプロジェクト。その歴史の中でいまだ未勝利の鈴鹿戦。今年度は開幕から2連勝と波に乗った状態で迎える事になりました。この勢いを保ったまま鈴鹿での初勝利と開幕3連勝、2年連続シリーズチャンピオンに挑みます。

◇学生の役割◇

1. テクニカルスタッフ
2. マネジメントスタッフ
3. ドライバーサポート
4. 広報スタッフ



1. テクニカルスタッフ

テクニカルスタッフの仕事は主にPIT内での作業を行います。

タイヤを清掃しながらホイールの損傷やエア漏れの確認を行ったり、タイヤの回転方向及び取り付け位置をトレッド面に記入します。またホイールアライメントを測定するためのジャッキアップ及び測定機器の設置などをメカニックと一緒にいきます。他にも、出火の恐れのある燃料などを扱う作業のそばで消火器を構えておく仕事や、ピット内の床の掃除、走行を終えた車両をキレイにするなどの、レース車両に直接関わる仕事を担当します。

初日はなかなか自分から動けない学生もいましたが、リーダーが的確に指示を出し、テキパキと作業を行っていました。

また、作業中に車両について気になったことを積極的にメカニックに尋ね、レース現場でしか聞けないような貴重なお話を伺っている学生の姿も見受けられました。



2. マネジメントスタッフ

マネジメントスタッフの仕事は主にレースを観戦するために、ご来場いただくお客様の対応を行います。お客様をおもてなしする部屋(ホスピタリティルーム)の設営準備から作業はスタートして、レース当日にはお客様への料理の配膳や飲み物の提供も学生が担当します。

チームのおもてなし担当スタッフからお客様への接客レクチャーを受け、学生は自分たちで考えて工夫しながら一生懸命お客様をおもてなししていました。

そしてもう一つ大きな仕事が、ピットワークです。旗を持ちながら大きな声で応援を呼びかけたり、グッズやステッカー、チラシなどを配布する仕事をします。



《テクニカルマネジメント スタッフインタビュー》



・2 班班長 3 年 高林 京輔

今回は班リーダーとして参加して、前回参加した時より自分の動きを意識した。前日経験したことを踏まえて、ピットでの作業やマネジメントでの指示出しを主に行った。自分が焦るといけないので、指示を出すときの言葉選びにも注意してできるだけ次に何をしなければいけないか考えた。マシンにトラブルがあった時は、メカニック達の動きと現場の緊迫感に圧倒された。しかし、焦りや諦める気持ちはなく一人ひとりがチームの一員として役割をこなし、「できるだけ早くコースにマシンを復帰させよう」という意識や、それに伴う作業の早さにプロの凄さを感じた。

リーダーでの経験をふまえて、「報告・連絡・相談」の大切さを身にしみて感じた。また、班員それぞれにふさわしい仕事を振り分けるのも大事だった。



・4 班班長 3 年 小林 大樹

ピット作業では、自分から仕事を探したりメカニックに作業について聴く姿勢が必要。リーダーとして、仕事を班員に割り振りつつ自分はできるだけ動かないようにして全体を見渡すのは難しかった。プロの作業は常に落ち着いていて、集中するときには一切の無駄なくこなしていたことに驚かされた。

3. ドライバーサポート

ドライバーサポートは主にドライバーの身の回りの仕事、そしてチームのメカニックが円滑に作業を行えるようにサポートします。ドライバーがレース中に身につけるヘルメットやグローブの管理を行ったり、ドライバーが使うタオルの準備やドリンク作り、食事の手配などあらゆる面でドライバーがレースに集中できるようサポートします。そしてチームメカニックも気持ちよく作業を行えるように、ドリンクの準備や食事のお手伝いをします。

また予選やフリー走行終了後にはレース走行結果、タイム通知表を受け取り、チームで結果を確認してミーティングなどでいつでも使えるよう準備も行います。

初参加の学生達でしたが、チームの方にしっかり仕事を伺って、分担しながら手際よく作業をこなしていました。



《ドライバーサポート スタッフインタビュー》



・1年 本美 璃乃

初参加の1年生2人だけだったので、分からないことだらけで大変でした。初めは、以前ドライバーサポートを務めていた先輩から聞いたことや、チームのスタッフさんに指示をして頂いた作業をひとつひとつこなしていくのが精一杯でした。慣れてくるとピット内の空気感が分かってきて、自分から気が付いてどんどん色々な作業にチャレンジしていくことができるようになりました。作業内容がとても充実していてやりがいがあるので、1日が1時間ぐらいに感じました。

レースが終わったあと、ドライバーさんに「サポートありがとう、助かったよ。」って声をかけて頂いた時に、「やり切った」という達成感で満たされました。

4. 広報スタッフ

広報は主にレースレポートの作成に関わる仕事を行います。レースレポートの構成から話し合い、それに必要な取材や写真を事前に計画してレースに臨みます。そしてサーキットでは自分達から取材交渉を行い、日程や質問内容を相談して、インタビューを行います。また活動している学生達を写真に収めるため、あらゆる活動に同行して撮影していきます。

レース終了後、取材データと写真を持ち寄り、自分達で工夫してレースレポートを仕上げます。取材内容についてベストカーの編集者さんやプロのメディアの方に意見を伺いながら練り上げて、自分達らしさをレポートに表現できるようにこだわりました。



《広報 スタッフインタビュー》

・広報リーダー 2年 宮内 秀喜

ほとんどの班のリーダーが三年生という中で、二年生の自分が広報のリーダーとしてやっていけるか不安だった。また広報は様々な交渉を自分たちで行わなければならない、それには各リーダーに指示を出して協力してもらうのが欠かせない。最初は萎縮してあまり指示が出せなかったが、それを見ていた統括が「S耐中は先輩も後輩も関係ない、皆で協力して最高の成果を出そう」と言ってくれた。その言葉で今までの自分のやり方を見つめ直し、先輩へ指示を出したり積極的に作業をすることが出来た。近藤監督や中村EVPへのインタビューも緊張したが、臆せず自分達の考えた質問をすることが出来た。

《統括 インタビュー》

・統括 3年 伊藤 瞭我

全体を見渡す観察力が大切で、一人ひとりの様子を見て声をかけたり言い方にも気をつけていた。慌てている人、困っている人、怒っている人など人によって様々な状況があるので、それに合わせた臨機応変に対応する能力が学生スタッフの中で最も求められる。

そして、学生のスケジュール管理、特に急なスケジュールの変更への対応がいかに難しく大変かが分かった。

普段の学校生活では学ぶことのできない貴重な体験ができ、自己の成長に繋がったと感じる。



◇STO 活動◇

今年からスーパー耐久機構のスタッフ活動のお手伝いをさせていただいており、ドライバーミーティングのお手伝いや出場している車のステッカー貼付確認、車検のサポートなど学生が普段できない貴重な経験を耐久機構スタッフの方々と共にさせていただきました。



◇スポンサー授業◇

MAC TOOLS



MAC TOOLS 製のコンビネーションレンチはボルトとの接触面にくぼみがあることで力をかけるときは外れづらく、外したい時は簡単に外れます。また工具にも厚みがあり握りやすく扱いやすいです。プロとして工具ひとつを選ぶのにもどういうところにこだわっていくべきか、その姿勢を学びました。

UD TRUCKS

トラックのエンジンや各 부품の説明を受けました。普通車に比べトラック部品はとて大きく驚きました。学生が実際にトラックで使用されているエンジンの上に乗せていただき、大きさや耐久性の高さを体感させていただきました。また、実際に使用されているピストンやブレーキドラムなどを見せていただき、乗用車との違いを知ることができました。



JVCKENWOOD



今一番伸び盛りで注目度が高い AUTOMOTIVE 部門からドライブレコーダーについての技術を教えていただきました。実際に他の製品と比較した映像を見せていただき、ケンウッド様の技術の高さに感銘を受けました。

◇ドライバー インタビュー◇

ドライバーに予選前、お話を伺いました。

・内田優大選手

「鈴鹿はテクニカルなサーキット、ジェントルとプロの差が出やすいためいかにその差を埋めるかが難しい。学生がいるピットは雰囲気も明るく、真剣な眼差しは僕達の励みになる。」

・藤井誠暢選手

「今回のレースはウェイトハンディが 60kg と重くてブレーキの効きが悪く、加速も劣る。タイヤの磨耗が厳しくとても苦しい戦いになる。学生と参加するレースはモチベーションがあがるので、貴重な時間を作りたい。」

・平峰一貴選手

「今回僕らはウェイトハンディがあるので、鈴鹿のテクニカルな部分、特にセクター1、セクター2が鍵になってくる。昨年以上に接戦なので皆気が引き締まり、学生達もキビキビと動いている。」



◇近藤監督 インタビュー◇

このレースは、とにかくチームのピット内の作業のミス無くすこと、タイヤ交換とガソリン給油の手順をきっちりこなすこと、そして4時間を3人で走るレースなので、ペナルティをもらわないことが重要。スーパー耐久レースとは「お客さんを呼んでお客さんに楽しんでもらうレース」というよりは、「自分達で参加して、いかに楽しむか」という所から始まったもの。これからも成長していくカテゴリであり、魅力の一つである。



◇中村EVP インタビュー◇

学生は今後販売会社等で働きながら、お客様の車をメンテナンスすることで対価をいただき、お客様の期待値に応える仕事をしていく。「タフなプロ」としての姿勢が、学生たちのゴール。

このスーパー耐久プロジェクトは「タフなプロ」を目指すカリキュラムの中でも特別編、究極のプロの世界を体験できる。プロの世界はどこまでも真剣勝負、これは販売会社でも同じくお客様一人ひとりとの真剣勝負である。

選抜学生は「選ばれた責任」を感じ、この貴重な経験を選ばれた学生以外にも伝えていってほしい。



◇広報あとかぎ◇

広報にはとても大切な役割があります。それは、その場で起きていた事実をこのレポートを読んでもくださっている皆様に正確に、そして分かりやすく伝えることです。今回の活動を通じて、ことばにする大変さと難しさを改めて感じました。沢山の方々にお会いしてお話しさせていただき、学ぶことが多くまだまだ頑張らなくてはいけないと感じました。今後活かして次年度は更に良いスーパー耐久の活動にしていきます。

最後になりましたが、このプロジェクトを応援していただいている皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

レポート作成 日産愛知自動車大学校 広報
宮内秀喜、兼井勇紀、福島澤平、佐野直輝、中根康介、芝田郁実

このプロジェクトは下記のパートナー企業に支えられています。

